



● Culture



角川まんが学習シリーズ「世界の歴史」 人類誕生と古代の王国 ©KADOKAWA CORPORATION 2021 アッシュルバニパル王は勇猛な姿も伝えられる一方、図書館に多くの文書を集めた

地方支配の実像に迫る

西山伸一・中部大教授(西アジア文明史・考古学)を代表とする調査団が、イラク北東部クルド自治区で、帝国の東部辺境の拠点都市だったヤシン・テペ遺跡を発掘し、地方支配の実像に迫る成果を上げている。

同遺跡のエリート層の邸宅からは、楔形文字の銘文をもつ青銅の首飾りが出土した。山田教授が解読したところ、帝国で信仰されていたナブー神の神殿で働く少年に贈られたものとわかった。少年の祖父の名がアラム語系の言葉で書かれ、父の名

がアッシリア風のアッカド語で書かれていた。文献の記録と併せると、おそらく祖父は南方のパピロニア地方からこの地に移住し、息子にアッシリア風の名をつけ、孫が神殿で働いたと考えられるという。

同遺跡は前8～前7世紀頃に栄え、帝国の中央から知事が派遣されるような行政州の中心都市だった。調査団はこれまでに、帝国中央から強い文化的影響を受けた未盗掘墓などを発見している。一方、庶民の生活区からは地方の伝統を持つ土器が



ヤシン・テペ遺跡の全景。ヤシン・テペ考古学プロジェクト提供

出土し、帝国中央と地方の文化が共存していたことが明らかになった。さらに、前7世紀後半の帝国の衰退期には、墓に副葬された装飾品にも地方色が強まった。西山教授は「この拠点都市では、アッシリアの中央集権的で強権的な姿は見えてこない。むしろ地方を尊重しながら、帝国の支配や文化を柔軟に適用した様相がうかがえる」と話している。

* 歴史研究が深まるにつれて世界史のトピックは見直されています。「世界史アップデート」では、研究成果を反映した最新説を、広く知られた従来説と比較しながら紹介します。「日本史アップデート」と隔週で掲載する予定です。